

「いはぬし」の現存最古写本について

川 瀬 一 馬

一

「いはぬし(塵主)」については、昭和の初め頃から日記文学の初期の作品として注目されだして、若干の論文も現われ、その中でも亡友土屋登君の『旅日記としての「いはぬし」について』(昭和十年十二月刊、国文学論叢第一卷第三・四号)などは忘れ難い思い出があるが、「いはぬし」は江戸時代、元禄二年に扶桑拾葉集に熊野紀行と遠江紀行の二書として印行せられたのが紹介の始まりである。他にはこれと匹敵する伝写本も知られず、その後、江戸末期に群書類従(卷三百二十七)に土佐日記と共に「いはぬし」として所収せられただけである。従って「いはぬし」の全貌を伝える本文は類従本のみに過ぎない。しかしながら、類従本の様な本文形態で残っている「いはぬし」は、その内容研究上、なお古写の伝本を探索して、自由な条件のもとに研究できることが望ましい。けれども新古にかかわらず、伝写本に乏しいのである。

私も長年古書籍を探訪する際、「いはぬし」についても、特に注意していたのであるが、これまでに見出したものは、僅かに現在手許に蔵する寛永を降らぬ頃に書写せられた一本のみである。これは昭和十年頃に某処で見出したものであるが、今機会を得てここに紹介することとする。そのほか、橋守部が類従本を移写せしめて、自ずから朱筆で書入れを行ったりした一写本も併せて家蔵するが、これは特に紹介する程のものでもないので、ここに附記するにとどめる。

江戸の日記首
 古寫本
 いほぬし

同 (卷末)

「いほぬし」という書名は、恐らく後人が仮りに呼んだ命名であらう。家蔵の古写本の原表紙には「いほぬし」と外題を墨書してある。この本は寛永を降らぬ頃の書写であることは疑いなく、その渋引原表紙も同時のもので、その外題も亦本文同筆と認められるから、この伝本によって少くとも近世極初期には「いほぬし」の書名が生れていたと言い得る。群書類従本は、「いほぬし」の書名のもとに「増基法師」と大題し、扶桑拾葉集の方は元禄二年に水戸光圀が古文を拾録印行するに際して、「熊野紀行」「釋増基」と題し、次に「遠江の道の記」を併せ、二篇としている。従つて中間の四十三首の和歌を含む家集的な部分をば取り除いてしまつてゐる。「遠江の道の記」は現存「いほぬし」の本文中にも大題の見出しを掲げているが、「熊野紀行」は扶桑拾葉集の編者の考へで抽出して独立させたのである。

そして扶桑拾葉集は卷二の巻首に増基の二書を収め、熊野紀行の分として、本文第二葉から第十葉表まで刻成してあるが、あのように熊野紀行と題して「いほぬし」の中から抽出するならば、それは第十葉表四行目上の「とこたへぬ」までで切るべきであつて、以下「つつみのもとにて」から「げにぞ世はかもの川浪たちまちに淵も瀬になる物は有けれ」までは削去しなければならない。この「げにぞ世は」の一首を熊野紀行の方にくつつけてしまったので、「遠江の道の記」との中間の家集的な部分の所収和歌総数を普通四十三首に数えることになっているが、それは不当である。扶桑拾葉集では「遠江の道の記」も本文は九葉で（本文每半葉十一行平仮名交り）、熊野紀行と略同量になっている。その両者の中間に長短の詞書を伴う四十三首（実は四十四首）の家集的な部分があり、要するに「いほぬし」は右の三部から成り立っているのである。恐らく中間になつてゐる家集的な部分はなおもつとあつたと推測せられる。それは増基法師と「とし子」などとの贈答歌の類が大和物語等に見えていることから言ひえよう。

増基法師は大和物語に増喜君、または増基なども記るし、(流布本) 第百二十二段には、とし子が志賀に詣でたりけるに、増喜君といふ法師ありけり。それは比叡にすむ殿上もする法師になんありける。それこれとし子の詣でたる日、志賀にまうであひにけり。波止殿に局などしてゐて、万の事をいひかはしけり。今はとし子帰りなんとしけり。それに増喜の許より、

逢ひ見ては別るゝことのなかりせばかつがつ物は思はざらまし

かへしとしこ

いかなればかつがつ物を思ふらん名残もなくぞ我はかなしき

となんありける。詞もいと多くなんありける。

(第百二十三段)

同じ増喜君、やれる人の許は知らず、かうよめりけり。

草の葉にかゝれるつゆの身なればや心動くになみだおつらん

と見えて、とし子(藤原千兼の妻)と交りのあつたことが知られ、その身分も少し判明するが、同じ大和物語によると、とし子の兄は念覚(又は明覚)という叡山の学僧で早く亡くなった大徳である。増基は念覚と同友であつたであろう。「いほぬし」の家集的な部分には時々賀茂社に籠りなど、賀茂と関係が深かつたのではなからうかと見られる節があり、また「いほぬし」の中で地方に知り合ひの僧が多いことなどが判り、元来増基が天台の僧で、叡山に学び住していたことは確かであろう。とし(俊)子という藤原千兼の妻なる女は、千兼の子を数多産んで亡くなつたと大和物語にあるから、増基法師が「いほぬし」の初めに「我身の罪をもほろぼさん」とある人ありけり。

いほぬしとぞいひける」などと述懐している心情の中には、僧侶の身で俗生活に心ひかれた過去を懺悔しようとするものがあつたと見られる。ただに天台僧としての捨心の未熟さを反省するのみではなかつたであろう。文芸に心を寄せたのも情趣を解しすぎた性格に由来したものかもしれない。熊野へ詣うで、遠江へ旅したのも、恐らく晩年のことであつたであろう。「いほぬし」の初めに、石清水へ参り、次いで住吉に参籠して次の如く述べている条などにもそれが伺われるかと思う。

かくてやしる／＼にさぶらひていのり申やう、此世はいくばくにもあらず、水のあは草の露よりもはかなし、さきの世のつみをほろぼして、行末のぼだいをとらんと思ひ倚る心ふかうて、世をいとふ事思ひおこたらずあらんによりてなり。ねがはくは、我春は花を見秋はもみぢを見るとも、にはひにふれ色にめでつる心なく、朝の露ゆふべの月を見るとも、せけんのはかなきことををしへたまへ。

世中をいとひすてゝむ後はたゞ墨の江にある松と頼まむ（掘家蔵本）

増基（基・基）のことは、平安末期、藤原清輔などの歌学者にもよく判らなかつたと見えて、袋草子に、彼後撰作者の増基は若し大和物語に侍る増基君か。件人は殿上法師也云々。

と記るされている。中古歌仙三十六人伝に「増基法師、後拾遺目録云、号三廬主」とあり、能因の玄々集に「増基二首、いほぬし」とある。「いほぬし」は上記の如く熊野紀行の中に自称し、すべて七箇所に出ている。それ故、この作品全体に冠した書名としては適當と言ってもよいが、それならば「いほぬし集」とでも称する方がより然るべき書名かもしれない。

四

次に家蔵の古写本について述べよう。この本は薄様斐紙（楮少々交漉）を用い、料紙、縦八寸八分、横六寸三分、

美濃本より小さく、判紙本よりやや大きく、渋引原表紙（楮紙）を添え、袋綴、一冊。表紙左肩に墨書で、また中央に朱筆で「いほぬし」と外題がある。ともに本文と同時の筆である。前後に副葉一丁宛を附し、本文は達筆で後半葉十一行平仮名交り、字面の高さ、約六寸九分。右上に焼焦げの跡があり、その部分を切截して、他を生かしてある。本文墨附十八葉。書写の年代はその書風、装幀等から推して、寛永を降らぬ頃の筆写と認められる。これを嘗て筆者に示した骨董商は、室町末期の写本と称して譲らなかったが、もしも写真を見れば、少くとも慶長頃の写本と見られるであろう。しかし寛永前半頃の書写と見るのが至当と思われる。（図版参照）ただし、この本の書写相を伺うに、古風な趣きがあるので、この本の原になった写本は、平仮名創始期の筆写本ではなかったかという気がする。さすれば、紀貫之作の土佐日記に次ぐ仮名文の書として、作者増基法師もしくはその関係者が筆録したものが、整わぬ形態で伝存していたのを、後に伝写したのが、この本の直接のもとになった本であったとも推測せられる。

熊野紀行とも名附くべき部分の終末が、家集的な部分とまぎれて連続書きになっているのは、原型本では恐らく別紙にしたためられていたものが、重ね併わされていたためであろう。家藏古写本では第六葉裏の二行目の上部に「とこたへぬ」と書き、続いて「つゝみのもとにて京ごくの院のついちくつれ」となっている。「つゝみ」以下は、内容が改まらなければならぬ部分である。（上記、扶桑拾葉集は、多分誤って次の和歌までを切れ目として収録している。）そして、次の五葉には四十四首の和歌と詞書とを記し、その末一行を隔てて、

これはとうたあふみの日記

と題し、次行「三月十日あづまへまかるに」以下の文があり、これも五葉と少々の内容が続いている。

この本の本文の性質であるが、先ず本文筆者が本文を一通り書写した後に、所拠の原本と読み較べて誤脱を補筆した部分がある。これは本文同筆で墨色がやや濃くなっているもので、別時の同筆であることが判る。その場合に、原拠本の本文の字形が紛らわしく「あ」と読めるかの如くなので「あ」と書きしるした文字を、後から読み返えす

と、「な」と読んだ方が意が通じやすいと考えて、「あ」の右傍に「な」と書き添えたような場合も数箇所あるが、原拠本に既に誤脱（と筆者が考えた）があることの明らかなる場合には「本ノマ、」と傍注した儘にしてある。（そういう部分が二箇所ある）なおまた「イ」として本文の右傍に注記してある場合が一箇所だけあるが、これは原拠本に既にそうなっていたものと思われる。本書の筆者が別本で校合して書き加えたものとは解し難い。「イ」の符号のない他の傍書を全部イ本の校合書入とは見なしえないからである。

本書の本文を見る場合に比較すべきは、群書類従所収刊本と扶桑拾葉集所収本文の二本のみであるが、後者は故意に中間を落してあるから、完本としては類従本のみとなるが、扶桑拾葉集の本文は比較的本文に混交がないようであるから、参考になる点が少くない。類従本は巻末に、

右いほぬし一巻以重相為氏真蹟書写以扶桑拾葉集及一本校合畢

の識語があり、少くとも三種の本文を混交していることが明らかである。しかし何れにしても、その原拠とした為氏真蹟と称する一本が家蔵の古写本とその源流を一にするものであることは確かであろう。ただ類従本の如き本文の形になってしまったのでは、為氏本の姿は明白ではなく、家蔵の古写本の方がより古形を保っているということとは言えると思う。

扶桑拾葉集所収の本文は本筋に於いて家蔵の古写本とはば一致するが、扶桑拾葉集に本文が欠字になっている部分は家蔵本には存し、ただ本文が読みにくい表記になっていて、扶桑拾葉集本に文字を欠いて空欄にしてある意がわかるようである。要するに、少異は存するが両本とも同系の本文であることは明らかである。扶桑拾葉集本は家蔵古写本の兄弟本に拠っているものと思われる。

家蔵の古写本は全本文を紹介提供する必要があるが、ここでは参考のため、扶桑拾葉集・類従本との比較を若干例表示しておく。

(家藏古写本)

〔熊野紀行〕

ちかの浜

はしの

浦風に

夜なかもおきて

とこたへぬ

〔四十四首の分〕

よのうきころひとへに思はれて

初雪とはぬ君をうらみん

あるにかみの

思給ふられ

〔遠江の日記〕

我おもふ

(ねらるやと)西

(誰にいはむ)ふる

山寺より

(都には)露の

をちみることものはゝの

(扶桑拾葉集)

ちかの浦

はしの

うら風に

夜なかもおきて

とこたへぬ

(ナシ)

(ナシ)

(ナシ)

(ナシ)

我思ふ

袖

ふる

山寺より

露の

をち本ノことものはゝの

(類従本)

ちかの濱

はしの

から風に(かへう)

夜なかにおきて

とてたちぬ

よのころうきころひとつに思わひて

初雪といはぬ君をうらみむ

あるそうの

給へられ

われをとふ

西

かる

山里より

露や

をちうることものはゝの(ハナカミ)

(そのはらの)…をのみきく

をのみきく

(みつぎなく)…すくといふ花と

すくといふ花と

(たかしやま)…鳴ける

なきける

ほのきく
のミイすくといふ花に
まてなきける
くナイ

五

「いはぬし」の現存本文を見ると、熊野紀行も遠江の日記も、ともに尻切れとんぼの形をしている。また、中間の四十四首もある種の一群の残存であることは明らかである。四十四首の家集的な残欠は止むをえないとしても、紀行日記の部分は現存の形で完結しているのか否かということである。

そこで熊野紀行の部分を見ると、或る年の十月十日頃に都を出て、石清水・住吉に詣うで、それより信田の杜・紀の国吹上の浜・石代・みなべの浜・むろの港を経て、み山に着き、み山参籠の様子をやや詳しくしてある。(これは平安朝の熊野詣のさまを知るよい資料となる)頃は霜月廿日である。それから東へなお旅を続け、花の岩屋・わうじの岩屋・四十九院の岩屋・たてが崎・伊勢国みわたりの浜からあふさかで終っている。それから進んで東海岸を志摩伊勢へ出て戻ったものか、或は吉野の方へ峯入りをして帰京したかも知れないが、那智を越えた所で終っているのは、ここから元来た道を引き返えたのではあるまいか。そのため重複する紀行の文をしるさなかったのもあろう。この点、「遠江の日記」の方では、三月から七月まで約半歳の旅の歌日記が、関山・鏡山からすのまた・尾張鳴海の浦・二村山・国府・宮路山・高師山・浜名の橋と進み、また戻って高師山・なるをの浦で終っている。以下、海道の旅の復路の記がないのは、元の道中を帰って印象が重なったためではなからうか。海道を上り下した場合に現存の日記紀行は殆どすべて同じ道を歩いた往復については記述していない。「いはぬし」も亦その類例に外ならぬと思われる。「遠江の日記」の如きは、「三月十日あづまへまかるに、つつみてあひみぬ人をおもふ」

と詞書して、「宮古出るけふばかりだにはつかにもあひみて人にわかれましかば」の歌をしるし、以下殆だ歌の詞書の連続にすぎない形の遠江の歌日記である。これはどこで終っても一連のまとまりとなっているわけで、現存本の姿で一応の纏まりがついているものと見てよいと思う。そういう点から、この三群より成る「いほぬし」を、土佐日記に次ぐ創始期仮名文の一佳品と見ることは至当であろう。類従本より原姿をよりしのぶべき古写本が残っていることは研究上幸であると言わねばなるまい。（今この一文を草しつつ、これを見出してから既に四十年の月日が経っているとは、夢の様である。）

